

子どもと出会う(8)

ことばが発達する

岩田 純一

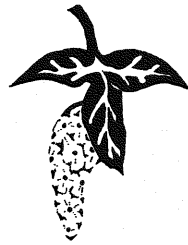
「祝辞」という映画があった。かなり以前なのでストーリーの詳細は自信ないが、その内容は印象に残るものであった。係長である主人公(財津一郎)の部下に、その会社の部長の息子がいる。その部下が結婚することになり、部長から結婚式に出席してテーブルス

ピーチを頼まれる。小心で生真面目を絵に描いたような主人公は、まだずいぶん先であるというのに、さっそくスピーチの本やビデオを買ってきては文案を作つて、妻や娘、おばあちゃんたちの前で聞いてもらう。しかし、なかなか気のきいたスピーチにならず悩む

日々が続く。先輩からのアドバイスももらい、ついに家族の者にもOKをもらえるスピーチが完成する。それは、社員旅行の宴席でお酌をしてきた芸者さんが、部長の息子に「いつも好いものばかり食べていらっしやるけど、どんなものがお口に合うのですか」と聞かれ、新郎が「そんなことありません、じゃがいもの煮転がしなど好きです」と言うと、その芸者がさっそくそれを作ってもってきた。それほどまいとは思えないのに、それを食べて「おいしい、おいしい」と感謝したという、新郎のやさしさや心遣いをさりげなくほめるといった内容である。

いよいよ結婚式当日がやってきた。主人公は、スピーチ原稿をしっかりと握り締めながら緊張して話す順番が来るのを待っている。じぶんの直前に、課長が立ってスピーチを始めた。なんと何と課長は、じぶんが苦勞してやつと考えた内容をまるで盗み見たかのようになつたく同じエピソードを話してはいない

か。冗談を交えながらの話術に参会者からも笑い声がきこえる。しかし主人公は頭が真っ白、パニック状態になつてしまう。いよいよじぶんの順番でありマイクの前に立つが、先を越されて言うべきことは出てこない。苦悶の表情をうかべてじつと黙っている様子に会場が静まる。主人公は今にも泣き出したいような気持ちで、額の汗をぬぐう。しかし、やはりことは出てこない。そのとき、親の意に反する職業(芸人)を選び、そのうえまだ一人前ではないのに結婚したいという息子、それに反対するじぶんととの確執を思いうかべる。親としてのじぶんのさまざまな思いと重ねあわせて、「いままで育てたご両親にとつてはいろいろな思いがとおりでしょうが、今日の結婚は本当におめでとうございます」と、やつとの思いで搾り出すように一言を述べる。首をうなだれながら家に帰つて、「ひよつとしたら会社をやめなさいいけないかもしれない」と妻に言い、主人公はじぶんがなさけなくなつ



てくる。そこへ部長から電話があり、覚悟して電話口になると意外なお礼のことばが返ってきた。

「きょうはほんとうにありがとう、耳あたりのよい美辞麗句はあつたけれども、きみのことばには心をうたれたよ」というものである。

この映画は人の心をうつことばとは何かを考えさせてくれる。相手の心に響くことばは難しい。しかし、それはどうも耳あたりのよい饒舌なことばではないようである。なぜ、ことばに詰まったような主人公の一言が参会者の心をうったのであろうか。それは、その搾り出すような訥々とした表現の中に、親としての思いが感じられたからではないだろうか。聴く者の心に響いたのは、それが口先のことばではなく、話す者の切なる思いを結晶化させたものとして聴く者の心情を共振させたからではないだろうか。

ことばの発達は

もともとことばは、じぶんの欲求や思いを何とか伝えたいという切実さを契機として獲得されてくるように思われる。他者に何とか伝えたい懸命の思いが、絞り出すようにことば音声として結晶化してくるのである。そのように考えると、子どもがことばを話し始めるのは、すごいエネルギーのもとにじぶんの思いを凝縮・結晶化させた行為なのである。この懸命さの感覚は、初恋の人にやつとの思いで「好きです」と告白するときにとえられるかもしれない。

しかし、ことばが発達するというのはそのような状態からは脱却し、ことばを自由にあやつつてペラペラと話せるようになっていくことである。そこでは、ことばにじぶんの切実な思いや感情をいちいち込めたいようでは、とうていペラペラ話せるようにはならない。また、それでは、とうてい話すのに身がもたない

ことになる。

子どもは三歳近くになると、ピンカーが「ダムの決壊期」とも名づけるように、母国語の基本的な文法の急激な習得がみられる。統語ルールにのっとりながらことばの表現を紡ぎだすことがうまくなってくるのである。それは、じぶんの思いや気持ち（心）とことばの表現との間に距離がとれるようになることでもある。すなわちことばが必ずしもじぶんの心情と分かれなく密着したものではなくなってくるのである。だからこそ、三、四歳にもなると、しだいに心にもないことを話せるようになるのである。ときにはさもそうであるかのようにことばで嘘をつく、ことばでうわべを取り繕う、ことばでじぶんを誤魔化すこともそうである。このようにことばと心が不即不離の関係から解放されてくるからこそ、心にもないことでもペラペラ話せるようになってくるのである。

少しネガティブなニュアンスに過ぎたかも知れない

が、ことばが心とは別のものとして距離化していくおかげで、ことばをじぶんの心情と切り離して操れるようになったのである。また、知識や概念といった客観的情報を伝え合う道具としてのことばの使用を可能にしたのである。言語の発達とは、最初は切実な気持ちの結晶として結ばれたことばから、しだいにそのような気持ちや思いとは必ずしも結びつかない表現が可能になっていくことであるとも言える。そうであるからこそ、口先でことばを操ってペラペラと饒舌・冗長に話せるようになってくるのである。それがことばの発達の一側面である。

生活のことば化

ことばと生活という視点からことばの発達をながめてみよう。ことばを話し始めた子どもは、必死にじぶんの思いを音声に込めて片言で話そうとする。そこで、じぶんの思いや心情が何とか伝わるといふ体験



が、さらに表現としてのことばの獲得を動機づけていくのであろう。このように、三歳頃にはそれ

まで獲得した語彙や基本的な統語規則によってじぶんの思いを何とか話すのには困らないほどになってくる。母親となら長い会話のやりとりもできるようになってくる。この頃、子どもがじぶんの生活をことばによって表現する、すなわち生活のことば化がなされ始めるのである。

生活がうまくことば化されるようになると、四、五歳の頃にかけて新たな変化が生じてくるように思われる。それはことばの過剰化とでも言える現象であり、多弁期ともよばれる言語表現の饒舌化、冗長化がみられ始めるのである。ことばが先走り、ことばが先行するようになってくるのである。それは、さまざまな言語行為となってみられる。じぶんでお話を作って語

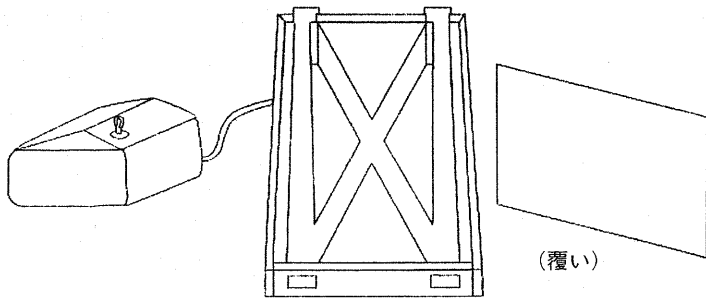
る、想像的にファンタジーを物語るなどといったことも、この過剰になったことばによってしだいに可能になってくるのである。ことばの過剰は、自らの表現の自覚的なメタ化を促していくことにもなる。仲間うちでの駄洒落、無駄口、語呂合わせといった表現や、さかさことば、しりとりといったことば遊びなどが盛んになってくるのもこの頃である。ことばを遊びの素材とするほどことばが過剰になり、自らのことばがメタ化されてくるのである。これらは、子どもがそれまで以上にことばを自由に操る能力を身につけてくることを示唆している。

ことばによる生活化

このようなことばの過剰によって、逆にことばが子どもの生活を組み立て、作っていくのに主導的な役割を果たすようになってくるのである。それは、じぶんの生活をことばによって表現することから、ことばに

よる生活化が始まるといつてよいだろう。ことばの生活化の始まりは、四歳から五歳児にかけての頃である。その意味で、この頃は一つの重要な転換期であるように思われる。二つほど発達の研究をみてみよう。

一つ目は、ことばを介して事象のルールを学び、そのルールにしたがって出来事を予測することができるかどうかをみたブルツクスら（二〇〇二）の研究である。図のような傾斜路をもった装置があり、上方には左右に二つの穴があいている。いずれかの穴からビー玉を入れるとまっすぐに傾斜をころがって下の出口から出てくるか、分路から斜めに横切って反対方向の出口から出てくるようになっていく。斜めにかかる時にはまっすぐにいく回路が閉ざされており、その結果、横に繋がっているランプの光がつくようになっていく。したがって、まっすぐに転がるときは、電球が消えていることになる。子どもには、装置の覆いをとってまずその通路がみえる状況でデモンストレーションがなされる。その際に「光が消えているときは、穴からビー玉をいれたらまっすぐに転がって出てくる」「光がついているときにビー玉を入れると、斜めに横切って反対のほうから出てくる」といった規則性を言語的に教えるのである。そのあとで、ふたたび装置を覆ってから、「光がついている（消えている）とき、この穴（左



▲図 ランプにつながった傾斜路の装置



または右) からビー玉を入れたら、どちらから出てくるか」という予想が求められるのである。そ

の結果、三歳児ではまっすぐに転がってくるときの予測は正しくできるが、斜めに横切って出てくるときもまっすぐに出てくると予測してしまう。しかし四歳児になると、両方(光の on ないし off)の場合とも教示されたルールにしたがって球の出でくる場所を正しく予測できるようになるのである。このことは、四歳児になると言語的なルールによる学習が可能になってくることを示唆している。すなわち、「こういうときにはこうする(こうなる)、ああいうときにはああする(あのようになる)」と、教示されたことばにしたがって生起事象を予測したり、じぶんの行動を組み立てたりすることができるようになってくるのである。まさに、ことばを主導とした生活の組み立てが可

能になってくることを示唆している。

このようなことばによる生活化は、仲間同士の言語的なやりとりを通して学び合うことを可能にもしている。ガートンら(二〇〇二)はそのことを示すような研究を行っている。彼らは、まず子どもたちが色、形、大きさで変化する十二の積木ブロックを用いて、それらの色、形、大きさ、色と形、色と大きさ、形と大きさといった六つの基準によって可変的に分類することができるかどうかをみている。その成績によって、子どもは高群と低群に分けられた。そのあと成績群の組み合わせペアが共同で、ミニチュアの家具を人形の家の台所や寝室といった部屋に分類しながら置いていく課題が与えられた。そのあとで、ふたたび最初の分類課題が事後テストとして与えられ、分類課題を共同で取り組んだ経験が、一人で積木分類をするときにどのような効果を及ぼすかをみたのである。その結果は、四歳も半ばになると、高低ペアの低い成績群で

事前テストから事後テストにかけて積木の分類成績が有意に向上するのがみられた。ちなみに同程度の成績ペアではそのような効果はみられなかった。そこで、低い成績条件の子どもはペアで取り組んでいるとき、どのような言語的やりとりをしていたのが分析された。成績が同程度のペアと比較すると、子どもの発話数はほとんど異なるらないが、発話カテゴリーの頻度の一つの特徴がみられた。それは高低ペアにおける低い成績の子どもにチェックング (checking) とよばれる発話が多く出現していたのである。それは「これはどこにおくの」「ここには何がいい」「その他には」といった相手への質問、「きみはどう思う」といった情報の要求、相手と課題について話し合う・議論する、といった発話の内容である。これらは問題解決のためにじぶんがなすべき行為を相手の考えや知識を借りながらチェックしているのである。それが、やがてじぶんでじぶんの行為をチェックしながら課題を遂行する

手がかりとして内在化されていくのである。このような言語的やりとりを介して、問題解決の仕方を他児から学ぶことが可能になってくるのである。

ことばによる生活化は、子どもたちの日常的な行動にもみられるようになる。ことばでいじめる、ことばで仲間と交渉する、ことばでかけひきをするといった行動も四〜五歳頃から目立ってくる。これらも、過剰となったことばを手段として、子どもの生活や仲間関係が組み立てられていく様子を示している。

ところで過去の体験エピソードを自伝的な記憶として物語るようになり、それが自己のアイデンティティとなり始めるのは四歳の頃からである。またことばによってじぶんの行動をプランニングし、その目標に向かってじぶんの行動を調節していくといったことも五歳頃にかけてしだいにうまくなってくる。ヴィゴツキーによると、この頃から、内言機能をもつひとりごとがみられ始め、それが自己の行為を制御・調節し、



思考のための道具として
機能し始めるといふ。じ
つは、それまでの外言か
らこのような内言の派生
も、外言としてのことばの過剰化がその内言化への道
を拓いていくのではないかと思われる。

やごばいじ

ことばの獲得は、じぶんの思いを懸命に音声として
結晶化させる試みから始まる。しかし、統語的なルー
ルの獲得と平行して、しだいにことばは自己増殖的な
発達をみせる。それによって、生活がことば化され、
さらにことばによる生活化が始まるようになってくる
のである。外界の認知、対人的な関係づくり、自己の
行動制御などが、ことばによって主導され、形づくら
れていくのである。その反面として、ことばが心情か
ら距離化していく。そのような距離化によって、こと

ばが心情とは関係なく客観的な知識・概念を伝える道
具として使われ、心にもないことありもしないことを
語（騙）り、また方便としての嘘も可能になったので
ある。おとなになるとは、そのようなことばの使い方
に習熟していくことである。われわれの日常のことば
を考えてみよう。そのことばに、愛の告白のように切
実な心情を込めることはまれであろう。そんな風にこ
とばを使おうとするなら、話すことにすごいエネル
ギーが必要になり身がもたない。聞く方も同じであ
り、適当に聞き流す。心から距離をおいて、方便とし
てことばを使えるからこそ口先でペラペラと話すこと
もできるのである。話す方も聞く方も、ときにことば
に空虚さを感じ、不信任を抱くのは、まさにことばの
なかにこの隔たりを感じとるからであろう。

たしかに四く五歳児にもなると、ことばがしだいに
過剰となり、ことばを操れるようになってくる。しか
し、そうはいつでも子どものごときは、まだじぶんを

表現したい、じぶんのことを伝えたいといった懸命な
思いや気持ちに根ざしている。したがって保育者は子
どものことばをおとなど同じモノサシで捉えてしまわ
ないように注意しなければならぬ。さもなければ、
心情に根ざして伝えようとするせつかくの子どものこ
とばを捉え損なってしまうことになる。「子どものこ
とばに耳を澄ます」ということは、そのような意味で
大切なのである。保育者はまた、子どもへ心を込めた
ことば、子どもの心に届けることばを使うことが求め
られるであろう。この頃のそのようなことばの受け渡
しが、ことばにじぶんの思いを込め、心が込められた
他者のことばに共振する力を育み、他方ではことばを
生活の道具として使う確かな力の育ちにもつながって
いくことになるのではなからうか。

(京都教育大学)

参考文献

- ピンカー (Pinker, S.) : 椋田直子訳一九九五『言語を生み
出す本能 (下)』日本放送出版協会
- Brooks, P. J., Hanaver, J. B. & Frye, D. 2002 Training 3-
year-olds in rule-based causal reasoning. *British Journal of
Developmental Psychology*. 19, 573-595.
- Garton, A. F., & Pratt, C. 2002 Peer assistance in children's
problem solving. *British Journal of Developmental
Psychology*. 19, 307-318.